ビリー・ホリデイという「表現媒体」解釈
映像・演劇を中心に

岩　本　裕　子※

要約

アメリカ黒人女性歌手ビリー・ホリデイ（1915-1959）が、21世紀に入ってさらに注目され、映画やドキュメンタリーとなって、ジャズ・ファンの耳目を集めている。日本のジャズ・ファンにとってビリーが永遠の存在であることは、海外で出版された伝記や研究書の多くが、出版直後に邦訳出版されたことでも明らかである。本稿参考文献一覧で10冊の伝記があり、その６冊は邦訳された。日本の音楽業界でのビリー・ホリデイ評価に留まらず、彼女の人生そのものが、映像（ハリウッド映画やドキュメンタリー）やブロードウェイ演劇でどのように表現されてきたかを本稿では検討する。白人コラムニストのウィリアム・ダフティによる「自伝」には、事実と異なる箇所が散在するために、ビリーは「伝説」となって伝記作家たちを悩ませ続けてきた。伝記作家達の仕事も確認しながら、ビリーの「実像」も再確認する。映像や演劇を中心に、彼女の人生の描かれ方を検討し、彼女の歌唱批評だけに収まらず、アメリカ黒人女性史に位置づけることを、本稿の究極目的とする。

キーワード　ビリー・ホリデイ　アメリカ黒人女性　奇妙な果実　ジャズ

目次

１．はじめに
２．ビリー・ホリデイ研究の整理
　2.1　黒人女性史研究からの評価
　2.2　歌詞「奇妙な果実」をめぐる事実確認
　2.3　自伝『黒い哀しい歌』から伝記翻訳まで
３．ハリウッド映画とブロードウェイ演劇
　3.1　映画「ビリー・ホリデイ物語」（Lady Sings the Blues: 1972）
　3.2　ミュージカル「シスタス」（SISTAS the Musical: 2014）
　3.3　演劇「レディ・デイ」（Lady Day at Emerson's Bar & Grill: 2015）
４．ドキュメンタリー“Billie”から映画“THE UNITED STATES vs. Billie Holiday”へ
　4.1　ドキュメンタリー“Billie”（2019）
　4.2　『麻薬と人間』（*Chasing the Scream*）にみるビリー・ホリデイ
　4.3　映画“THE UNITED STATES vs. Billie Holiday”（2021）
５．おわりに
註
［SELECTED BIBLIOGRAPHY］
［APPENDIX］

※浦和大学　社会学部

1．はじめに

「南部の木に／奇妙な果実がなっている／葉っぱに血がついている／根っこにも血がついている／黒人の死体（Black body）が南部のそよ風に揺れている」[1]で始まる「奇妙な果実」（Strange Fruit）と題された歌は、アメリカ黒人女性歌手ビリー・ホリデイ（Billie Holiday: April 7, 1915-July 17, 1959）の一大出世作である。歌詞の由来は、改めて2. 2で事実確認する。

アメリカ南部で黒人男性が南部白人からリンチ[2]に遭い、ポプラの木に吊された様子を描いている。南北戦争終了後に始まった南部黒人への暴力行為は、19世紀末、1892年にはピークに達し、20世紀に入っても止むことはなかった。21世紀現在、世界中の人々が目撃した「警察官による暴力」（police brutality）によって世界中に拡散したBLM運動は、この黒人リンチからの流れである。この歌が、ビリーをFBI捜査の対象（cf. 4. 2&3）ともさせたのだった。

ビリー・ホリデイの人生に関しては、最後に［APPENDIX］として「ビリー・ホリデイ生涯概略年表」をつけたので、詳細な議論はしない。彼女の人生が、映像や演劇でどのように表現されてきたかを検討することが本稿の目的である。

生まれたときには、エリノーラ・フェイガン（Eleanora Fagan）と名付けられ、長い名前を縮めて祖母が「ノラ」と呼ぶことを嫌った。父からはお転婆だから男子名「ビル」で呼ばれたが、ビリー・ダヴ（Billie Dove）の大ファンだったため「ビリー」と呼ばれたがった。芸名となった苗字は父の苗字で、生涯一緒に住むこともなかった音楽家の父親への想いの表れだろう。

さらにビリーには、もう一つ重要な呼び名「レディ・デイ」（Lady Day）がある。3. 3で検討する演劇のタイトルにもなった。ビリーがハーレムの「ログ・キャビン」で、歌手として歌った後、客からのチップを受け取るとき、客にこびを売らなかったことから「淑女」（Lady）と呼ばれるようになり、ホリデイのデイでついた呼び名だった[3]。

21世紀の日本でも、ジャズ・ファンにはビリーが永遠の存在であることは、海外で出版された伝記や研究書の多くが、出版直後には日本語に翻訳出版されたことでも明らかだろう。日本でのビリー・ホリデイ評価をふまえて、原書ではなく翻訳から引用する。研究論文では原書からの引用が当然だが、翻訳書籍を引用して日本語翻訳に敬意を表することにした。

2．ビリー・ホリデイ研究の整理

2. 1　黒人女性史研究からの評価

「女性と言えばつねに白人、黒人と言えば男性」とされてきたアメリカ社会の現実を訴えたのは、1982年出版の黒人女性学の入門書名[4]だった。公民権運動の成果の一端として、1970年代には全米の大学で「黒人学」「女性学」が講じられるようになったが、「黒人女性学」が注目されるには時間がかかった。すでに1980年には「黒人女性歴史家学会（ABWH）」が創設され、アメリカ社会へメッセージを発信してはいたのだが[5]。

全米に散在していた黒人女性史研究業績を、学問的に集約したカールソン社シリーズ全16

巻（史料集[6]）が出版されたのは1990年で、1990年代には堰を切ったように、同編者によって、アメリカ黒人女性百科事典（以下BWAと略記）が1993年、1997年、2005年と三種類出版[7]され、アメリカ黒人女性史研究の基盤は整ったのだった。

本稿の議論を始めるにあたって、まずビリー・ホリデイの人生の確認をする必要がある。多くの音楽評論家によって紹介され続けるビリーだが、黒人女性史の視点から確認しなければならない。そこでBWA第１巻（A-L）掲載のHOLIDAY, BILLIE（1915-1959）[8]から始める。

執筆者スーザン・クック（Susan C. Cook）は、音楽学研究者（ウィスコンシン大学教授[9]）でネット情報では白人のように見える。７冊の書籍を参考文献にあげているが、自伝以外では、1975年出版のジョン・チルトンによる評伝（巻末「参考文献一覧」５番、邦題『ビリーホリデイ物語』）を用いている。ほぼ同じ内容のまま、ジャンル別に出版し直した *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*[10]では、やはりクックが担当した。最後のパラグラフで死亡、葬儀に関する叙述をする前にパラグラフが１つ追加され、最新研究２点が紹介されている。巻末「参考文献一覧」の1994年出版の12番（邦題『月に願いを―ビリー・ホリデイの生涯とその時代』）と1995年出版の13番（邦題『ビリー・ホリデイ―音楽と生涯』）である。

さらに、2000年出版の14番（邦題『ビリー・ホリデイと《奇妙な果実》―“20世紀最高の歌”の物語』）を含めた３冊の翻訳を見ても、日本出版界がいかにビリー・ホリデイをめぐる論考に敏感かがわかる。2005年にはBWAの増補改訂版[11]が出版され、このときのビリー・ホリデイの項目もクックが担当し、新たに14番を参考文献に加えている。

クックは音楽学研究者のためか、ビリー・ホリデイの黒人女性としての人生というよりは、音楽性に焦点を当てた人物紹介となっている。最初の紹介以降、次々出版されたビリー・ホリデイ評伝をふまえて、2005年増補改訂版では、大きな変更はないものの、最新研究をふまえた改訂内容になっている。

白人女性による百科事典叙述とは別に、黒人女性研究者からのビリー・ホリデイ評価二例を整理しておく。奇しくも同じ1998年に出版された。まず黒人女性史研究者の第一人者で、全ての百科事典主編者であるハインによる黒人女性史の概説書 *A Shining Thread of Hope: The History of Black Women in America*[12] 第10章「大恐慌時代」にビリーは登場する。

「黒人芸能人の厳しい矛盾、つまり自分の芸術を、抑圧者のために演じるということだった。その犠牲者の一人は、偉大なるビリー・ホリデイであった」と論じて、ビリー論を展開した。彼女の半生を紹介した後、「奇妙な果実」の全ての歌詞を引用して、黒人リンチが行われていた当時の状況批判を行った。ハインが、「奇妙な果実」同様に、強いメッセージを持った曲としてあげたのは♪Fine and Mellow だった。黒人女性に対してひどい扱いをする黒人男性を批判し、ブルースにありがちな不満を歌うのだが、たとえ男が「素敵で温厚に(Fine and Mellow)」なったとしても、貴方を捨てるわ、と歌うのだった。ハインが選んだこの２曲に通じるのは、黒人男性に対して黒人女性が抱く深刻な感情を表現しているという

ことらしい。ちなみに♪Fine and Mellowは、ライヴ演奏で歌うもっとも多い10曲の一曲に選ばれている[13]。

ハインは、ビリーのことを1930年代から40年代を代表するもっとも偉大なジャズ歌手の一人と評価して、さらにビリーに続く黒人女性歌手として、エラ・フィッツジェラルド、ダイナ・ワシントンなどの活躍を紹介した。最後にマリアン・アンダーソンのオペラ歌手としての世界的な活躍と、1939年のリンカン・メモリアルでの人種を越えた聴衆を迎えた野外コンサート[14]で締めくくり、「黒人女性アーティストはアメリカの新しい魂の象徴となった」と讃えた。

二例目は、書名にもビリーの名前が登場する。学者と同時に活動家でもあるアンジェラ・デイヴィスの *Blues Legacies and Black Feminism: Gertrude "Ma" Rainey, Bessie Smith, and Billie Holiday* である。書名通りブラック・フェミニズムの流れで「奇妙な果実」を論じている[15]。アメリカ黒人女性初のノーベル文学賞受賞者であるトニ・モリスンは「アンジェラ・デイヴィスの本は私にとって完全な啓示であり、真剣な再教育ともなった」と讃辞を贈った。

「ブルースの母」ガートルード・マ・レイニー、彼女の夫が主催する旅回り寄席芸の一座にいた駆け出しの歌手でのちに「ブルースの女王」と呼ばれたベシー・スミス、そしてビリー・ホリデイという３人のブルース歌手の歌詞から、黒人女性の立場を解釈した。「ブルースの歌詞で共通して歌われてきたDVを公に認識すべき問題と定義できるほどブルースは重要な要素を持っている」と評価したのだった。

ビリーを扱った章は二つ、曲名を主題、その曲がもつ意味を副題としている。まず「女が男を恋するとき」の副題は「ビリー・ホリデイのラブソングの影響」で、曲の歌詞の一部と、自伝からの引用がエピグラフの役目を果たしている。自伝からは、ビリーがハーレムのアポロ劇場に初出演できるきっかけとなったエピソードが選ばれていた。

「ログ・キャビン」のあとビリーが「ハッチャ・クラブ」と掛け持ちをしていた頃、友人ラルフ・クーパーがアポロ劇場の経営者シッフマンにビリーを雇うよう薦めた。「あんなに遅く、けだるく、ものうげに歌うのを聞いたことがないはず」「とにかく聞かなきゃわからないよ」と紹介した。この会話を聞きながらビリーは「最大の讃辞だった。私を他の歌手に比較しないで、他を私に比較した」と思ったのだった。

この引用部分のあとに、ビリーが週50ドルでアポロ劇場と契約したと続いている。さらに「ベッシー・スミスとルイ・アームストロングのレコードを除いて、後にも先にも私は、他人から影響をうけたことがない」[16]とも。デイヴィスがエピグラフとして選んだ部分は、ビリーがビリーたる由縁が書かれていたためだろう。ビリーが歌う歌詞分析によってデイヴィスは、我々が彼女の歌に心動かされるのは、ジェンダー、人種、階級の歴史的変化を主張してきた社会運動が作り上げてきたものに通じるものがあるからだと結論づけた。

もう一つ「奇妙な果実」の章の副題は「音楽と社会意識」である。エピグラフには、歌詞がすべて引用されている。この章は本稿での議論の多くが重複するので、結論だけ紹介する。

マ・レイニーとベシー・スミスという流れの一端にいるビリーだが、ビリーの後輩として、ニーナ・シモン、トレイシー・チャップマン、エリカ・バデュを挙げながら、彼女たちがどのようにビリーを受け継いでいるのかが議論されている。以上で、黒人女性史研究からの評価とする。

2.2　歌詞「奇妙な果実」をめぐる事実確認

1930年８月７日夜、米国中東部インディアナ州マリオンで、二人の黒人男性（J. Thomas Shipp & Abraham S. Smith）が群衆によって、刑務所から引きづり出されて木に吊された結果、リンチ死した。南北戦争終了後から続く黒人リンチは、決して南部だけのことではなかった。

リンチ群衆（老若男女の白人）の行動も同様で、リンチで殺すことを楽しむだけでなく、その光景を写真に撮る写真家のカメラに向かって、群衆が微笑むのは19世紀末から変わらない。南部ではない地域でのリンチが、21世紀の現在も語られるのは、そこで撮られた写真のためで、カメラマン（Lawrence Beitler）は何千枚も現像して販売したという[17]。

公民権運動関連雑誌にも掲載されたこの写真を見て衝撃を受けたのは、ブロンクスで高校教師をするエイベル・ミーロポルであった。彼の両親は、ポグロムから逃れてアメリカに移民したロシア系ユダヤ人だった。エイベルは共産党員として活動しながら、歌詞を書き曲作りをしていた。作詞家としては、ペンネーム「ルイス・アラン」[18]を使っていた。

エイベルの実子となるはずの二人の男の子を死産でなくした経験から、その二人の名前をそのままペンネームに使ったという。エイベル・ミーロポルの残した史料は、ボストン大学で「エイベル・ミーロポル・コレクション」として保管されている。歴史的には、1953年に原子爆弾のスパイ容疑で死刑になったローゼンバーグ夫妻の遺児二人を養子にした人物としても知られる。エイベルの養子となった次男ロバート・ミーロポルとのインタビューを試みた日本人ジャーナリストの書籍に詳しい[19]。

エイベルがビリー・ホリデイに初めて会ったのは、1939年１月「カフェ・ソサエティ（クラブに集う上流階級）」というグリニッジ・ビレッジにあるクラブだった。「頭の固いもったいぶった人をこてんぱんにやっつけるナイトクラブ」は、ユダヤ人バーニー・ジョゼフソンが、人種差別のない店を目指して作った酒場で、1938年12月に開店した。ニューヨークだとしても、当時、南部の掟に近い黒人客の出入りできない店がほとんどであった。

ジョゼフソンがエイベルに「奇妙な果実」の歌詞を、持ってくるように言ったのだった。この歌が最初に世に出たのは、教職員組合の刊行物『ザ・ニューヨーク・ティーチャー』（1937年１月号）で「苦い果実（Bitter Fruits）」と題されていた。「どうしてもビリー・ホリデイに歌ってもらいたい」とエイベルは、ピアノの前に座って歌い出したという[20]。

歌詞に感動したビリーがすぐに思い出したのは、1937年に亡くなった父親のことだった。南部を巡業中だった父親が、急性肺炎を患って病院を探し続けたが、黒人を入れてくれる病院を見つけることができないまま亡くなった。リンチにこそされなかったとは言え、南部白

人社会に見殺しにされたというビリーの怨念は、「奇妙な果実」を歌うときの原点だったのだろう。「この歌を歌うと全身の力を抜かれてしまい、ひどい疲労をおぼえるのだ」と告白している。

南部での巡業では歌わないようにしているこの歌を、マイアミのあるクラブで20件もリクエストされ歌ったときの様子を、やはり自伝でこう語っている。「最後のフレーズにきたとき、私はこの数ヶ月間出したことのない激怒と、迫力のある声になっていた。…私は全部の聴衆を恨みのこもった一言一言で打ちのめしてゆく気持ちで歌ったのに、拍手は聞いたこともないほどの音になった。ステージを降り…まだ拍手は続いていた」と[21]。

一般的に「奇妙な果実」は、ビリーが作った歌とされることもあるが、事実は以上である。マーゴリックによる伝記（2003年）第２章は「『奇妙な果実』を書いたのは私だ」とされ、その註には、エイベルのペンネームの誤記に言及している。本稿註18で説明した通りである。

2.3　自伝『黒い哀しい歌』から伝記翻訳まで

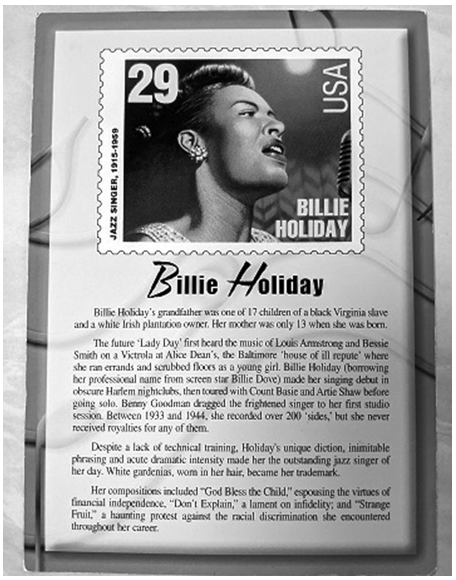
ビリーの自伝 *Lady Sings the Blues* 出版翌年の1957年、日本では『黒い肌』と題され清和書院から翻訳が出た。だが、同出版社の閉鎖で「ごくわずかの部数が、愛好家の手に渡ったにとどまった」[22]らしい。筑摩書房『世界ノンフィクション全集 40』に入ることになったが、編集上の理由から原書の25％を削除し『黒い哀しい歌』として1960年に再録、出版された。1971年に改訳改版され、晶文社から全訳出版されたのだった。

『奇妙な果実―ビリー・ホリデイ自伝』と題された翻訳は、ジャズ評論家の油井正一とジャズに造詣の深い大橋巨泉によった。自伝とは言え、ビリー本人が書いたのではなく、ほとんど白人コラムニストのウィリアム・ダフティ（一人息子ベヴァンの名付け親はビリー）が執筆した。「訳者あとがき」にも「著述家ウィリアム・ダフティの協力を得て」と謝辞がある。

改訳改版を機に、ビリー・ホリデイの全レコード蒐集家だった大和明による「ビリー・ホリデイの人と芸術」も加えられた。初版の1971年以降、増刷を重ね続け（筆者所有は1987年26刷）1998年には「晶文社クラシックス」[23]の１冊となった。「事実と虚構をない交ぜにした売らんかなの姿勢で書かれたW・ダフティ版によるビリーの半生記」[24]ながら、今後もビリーのファンに読まれ続けることだろう。

伝記としては、1975年出版のジョン・チルトン『ビリー・ホリデイ物語』[25]（1981年翻訳）が最初だろう。英国のジャズ・トランペッターでジャズ研究家のチルトンによる伝記は、その後多くの伝記作家や研究者に引用されてきた。前節でルイス・アランの人名表記で言及したように、事実確認上問題もあるが、この伝記が出発点であることは間違いない。

残りすべての伝記に関して、詳細に検討する紙幅がないので、巻末「参考文献一覧」番号に従って、確認する。ただし17番ヨハン・ハリ『麻薬と人間』は、別節（4.2）で扱う。６番以降翻訳されなかったのは、６、７、８、10、15番の５冊で、10番は「郵便葉書シリーズ」[26]の一つである。



Postcard on Billie Holiday

郵便葉書［上掲写真］でのビリーの説明最初の二行は次である。「ビリー・ホリデイの祖父は、ヴァジニアの黒人奴隷とアイルランド系白人農園主との間に生まれた17人のこどもの一人だった。彼女の母親は、彼女を産んだときわずか13歳だった」と。すでにこの後半部分に事実誤認がある。ビリーの自伝冒頭で「私が三つになったとき（中略）父は十八、母は十六」と書かれているための「事実」だからしかたがない。ビリーを産んだ母親サディの年齢が19歳だったことは、1975年出版のチルトンによる伝記プロローグで「ビリーの母の墓石には、サディは1896年に生まれ、1945年に死んだと刻まれている」[27]とある。さらに1995年出版のニコルソンの伝記では、冒頭で母親サディ・ハリス（フェイガン）が1895年７月生まれで、1915年４月にビリーを産んだと記している。つまり母親は19歳だったのである。

ニコルソンはビリーに至る先祖に関して詳細な調査を重ねて、巻末に「ハリス家 家系図」と「フェイガン家 家系図」[28]を付けている。郵便葉書に記された祖父の名前はチャールズ・フェイガン、1869年生まれで８人きょうだいとなっている。祖父の母親は奴隷（父親不明とある）だが、祖父は戦後生まれで奴隷ではない。これまた事実誤認である。

公式郵便葉書の冒頭二行は間違いだが、あとに続くビリーの半生、音楽の業績に関してはほぼ正しいのだろう。「技術的な訓練を受けないにもかかわらず、ホリデイの独特な発声法、真似の出来ないフレージング、鋭い劇的な強烈さは、彼女を当代一のジャズ歌手にした」とあり「髪に付けた白いクチナシの花は彼女のトレードマークとなった」ともある。

邦語書籍及び論文は、「参考文献一覧」番号で９、16、18番の３作となる。この３作以外は英語圏で出版された評伝、伝記で、５、６、12、13、14番の５作が翻訳された。17番は翻訳だけでなくハリウッド映画化もされたため、4.2と4.3で詳細に検討していく。15番は本稿脱稿直前に入手でき、筆者が導き出す結論に近い分析[29]をしていることが確認できた。

３．ハリウッド映画とブロードウェイ演劇

3.1　映画「ビリー・ホリデイ物語」(Lady Sings the Blues: 1972)[30]

映画「ビリー・ホリデイ物語」はビリーの自伝に基づき、原題は自伝と同じ“LADY SINGS THE BLUES”である。自伝出版後、ハリウッドでは何度も映画化が企画（ドロシー・ダンドリッジ[31]主役案あり）されたが、実現しなかった。1960年代のハリウッド映画のテーマにふさわしくない部分をビリーの人生が持っていたためで、公民権運動全盛期ながら映画界はまだ追いつけず、人種問題を扱った映画を受け入れる素地はなかった。さらに、麻薬患者であったビリーをハリウッド映画で扱うほど寛容な時代でもなかった。

「ジャズ史上最大の歌手」と評価されたビリーの波乱に満ちた人生は、映画化されてみると、美しいラブ・ストーリーになっていた。割り切れなさが残る、納得できない映画だった。黒人作家ジェームズ・ボールドウィンが、ハリウッド映画を批判した著書『悪魔が映画を作った』の中で、「ビリー・ホリデイ物語」に関して酷評している。自伝を基本にしているはずの映画が、自伝にない部分をかなり表現して、ビリーに関して間違った印象を観客に与えていると批判した。自伝の中でビリーは正直に何も隠さず自分の人生を描いたはずが、映画では何一つ十分に伝わっていないとしたボールドウィンは、映画批評を次のように結んだ。「この映画は、…ひとりの天才的な、しかし弱く自堕落な女が…彼女を熱狂的に崇拝さえした社会にも十分応じることができなかった…という印象をわたしたちに残すのである」[32]と。

生い立ちの面でも、ビリーと似通ったところを持つダイアナ・ロスの次のような思いが、現実からは遠い「美しいラブ・ストーリー」に、映画を仕上げる方向へ向かわせたのかもしれない。「私が望んだわけではないけれど、私は黒人として、しかも貧困に苦しむ家庭に生まれた。私が望んだ貧困生活ではなかったけれど、だからといってそれに負けるのは私が一番望まないこと。望みもしないことで弱音を吐くのは私の柄じゃないわ。ミス・ホリデイの不屈の精神は私の大きな支え。私の精神でもあるの」[33]と。

こうした思いを持つダイアナは、終幕はビリーの死に顔で、というシナリオにも納得せず、結局ダイアナの主張が通って、ビリーの最盛期、カーネギー・ホールでのコンサートで終幕というシナリオに変更された。結果として残された「ビリー・ホリデイ物語」の映像は、ビリー・ホリデイの実人生とは大きく遊離してしまったことは否定できない。

ビリーを「レディ・デイ」と名付けたのは、テナー・サックス奏者のレスター・ヤングだった。映画には全く出てこないこの偉大なテナー奏者は、モダン・ジャズへの道を拓いたことで知られるが、事実上ビリーにとって生涯の友であった。映画でのルイス・マッケイ（映画ではビリーの生涯で「唯一の男」のように描かれていた黒人男性）に当たる存在は、実はレスター・ヤングだったのである。

レスターとは生涯の友であると同時に、一時期は恋人として一緒に暮らしたこともあった。「レディ・デイ」と名付けてくれたレスターに対してビリーは「プレス」と呼び返した。その呼び名の理由を自伝でこう説明している。「私はいつも、レスターを最高だと思ってい

たから、称号も最高でなければならないと考えていた。アメリカでは帝王も、伯爵も公爵も、何の価値もなかった。当時、最高の男は、大統領のルーズベルトだった。そこで私は彼のことを「プレジデント」と呼び出した。それは縮まって「プレス」になったが、その意味するところは依然、我が国のナンバー・ワンである」と。ビリーがナンバー・ワンに選んだ黒人男性が映画に登場しない理由は定かではない[34]。

映画で描かれた人種差別に直面するエピソードの一つは、KKKと出会う場面だった。白人楽団が乗ったツアー・バスの中で、唯一の黒人であるビリーの存在は、南部白人には信じられない状況のはずで、楽団の男性たちはビリーを隠してKKKから見えないようにして通り過ぎようとした。ところが、隠されて南部白人たちのそばを通ることに我慢しきれなかったビリーは、顔を上げてKKKの団員たちを罵り始めるのだった。彼らがそれを許すはずもなく、バスに向かって攻撃が始まるのだが、命からがら逃げ出すという場面だった。

カーネギー・ホールで超満員の聴衆を前に、逮捕後の復帰コンサートを成功させたという映画のフィナーレは、見る人に心の豊かさを残すのだろうか。筆者には、語り残されたビリーの人生の哀れさがいとおしくてならなかった。ビリーの人生は、他の歌手たちとは違う問題を抱えていたからこそ、彼女の歌は深みを増して、人々の魂を揺さぶり続けているはずだろう。

「参考文献一覧」６番の伝記作家ジェームズ・バーネットによる解釈は、説得力を持つ。すべてを壊してしまう麻薬から、なぜビリーは抜けることができなかったのかの問いに対して「その核心となっていたのは『不安感』だった。人種問題、家庭環境、社会背景、そして彼女が望むほどには彼女の芸術が大衆に受け入れられないことなど、様々に絡み合った不安を解かなければならなかった。彼女の不安の大部分は…男にまつわる不安だった。頼りになる友人や、彼女を深く気遣ってくれる友人が大勢いたにもかかわらず、自分を深く傷つけたり、悲しませたりする男ばかりと関係を持った。…孤独と悲しみの中に取り残され、物質的、経済的に搾取されるか、または精神的にダメージを受けた」[35]と。

ビリーの深い苦しみや悲しみからくる不安感は、彼女を人生のどん底に落としていったが、ビリー・ホリデイの歌という貴重な財産を後世に残した。ビリーの歌は、彼女の不安感ゆえに聞く人の心を揺さぶらずにはおかない。多くのファンを惹きつけて止まない理由はここにあると言えるだろう。

3.2　ミュージカル「シスタス」（SISTAS the Musical: 2014）[36]

ミュージカル「シスタス」は、アメリカ社会で二重、三重の差別を抱えて生きてきたアメリカ黒人女性の歴史を、彼女たちのヒット曲を紡ぎながら語り継ぐ形式で展開される。2005年に誕生した「シスタス」は、2011年10月にブロードウェイ・ミュージカルとしてデビューしたのだった。筆者は2013年３月と８月に２回「シスタス」を観る機会を得た。

「ベスト40（Top-40）曲を紡いで語られるアメリカ黒人女性の物語は、３度のトニー賞受賞者ヒントン・バトル制作、ドロシー・マーシック脚本、ケネス・フェロン監督作品であ

る」という宣伝文句の元、連日公演ではなく週末のみ週２日間だけ、マンハッタン46丁目の聖ルカ教会地下にある劇場で公演された。３月鑑賞時点では、劇場で配布された小冊子（brochure）以外十分な資料もなく、CDもDVDも入手できなかった。８月２度目の鑑賞日に、貴重な史料と遭遇できたことで、活字として残すことが可能となった。

2012年秋、ションバーグセンター（ハーレム135丁目にあるニューヨーク公立図書館分館）において、同センター主催講演会が開催された。「シスタス」に出演した２人の黒人女優、ジェニファー・フーシェとレキシー・ローデス、ケネス・フェロン監督、さらに白人女性の劇作家（原作者）ドロシー・マーシックの４人がゲストとして登壇した。各自から発言された後、会場に集まった聴衆との質疑応答（インタビュー）が行われた。66分間の講演会が録画されていて、筆者は2013年８月ションバーグセンターでこの映像を見た夜に、２度目のミュージカルを見たのだった。さらに、ミュージカル終了後に、脚本家ドロシー・マーシックからミュージカルのDVDを購入できたことで、2014年に論文として残すことができた。

講演会の最初、ジェニファー・フーシェによる独唱から始まった。ビリー・ホリデイの一世一代の出世作「奇妙な果実」だった。アカペラで歌われたこの歌の意味を知らない聴衆は皆無のはずの会場は、静まりかえって聞き惚れていた。南部白人によるリンチによって、ポプラの木に吊された黒人男性の死体を表現する「苦い作物」（bitter crop）で閉じるこの曲は、ミュージカルでは、親族の男性について語られる部分で歌われた。

舞台に登場する４人の人種を超えたシスター（一人は黒人男性と結婚した白人女性ヘザー）たちが「告白」しながら歌い上げるのだった。「奇妙な果実」が歌われた場面を紹介しよう。祖母の遺品が置かれた屋根裏には、沢山の箱が置かれて、その箱から次々懐かしい品々が出てきて、そのたびに歌が紡がれるのだった。

シスターの一人、ロベルタ（ジェニファー・フーシェ）の個人情報はほとんど知らされることなく、少し皮肉屋だということが台詞から推測できた。白人たちへの警戒や怒りは消えることはないようで、白人の義妹ヘザーに対しても「白人の貴女にわかるわけがない！」と言い返す場面もあった。このロベルタから思いもかけない「告白」がなされるのだった。

タミカ（姉シモンの娘）が、誠意のないボーイフレンドに会いに行こうとしたため、やめさせようとして思わず「行ったら私のようになるわよ！」と叫ぶのだった。一同静まりかえり、ロベルタの告白を聴くのだった。ロベルタが13歳の時、見ず知らずの白人男性にレイプされたのである。事件が起きて帰宅したとき、両親に全てを話し、両親と一緒に警察にも行ったが、警察官は全く取り合ってくれなかった、とも悔しそうに話した。

大声で泣き出したロベルタをシモンが抱きしめた。自らの過去を告白したロベルタは、黒人男性がリンチの被害に遭ってきたことにも触れ、テネシー州在住だったウィリアム叔父がリンチで亡くなったことを話してから、♪Strange Fruitを絶唱した。ションバーグセンター主催講演会で歌ったとき以上に、熱のこもった訴えに、聴衆たちはただ静かに聴くだけだった。

講演会では、主にジェニファー・フーシェと原作者ドロシー・マーシックが語り、監

督ともう１人の若い女優は聴衆からの質問に答えた。まずマーシックは「シスタス」ができあがった経緯を説明して、「待つべきだ！」と言われ続けた黒人女性たちが、気づき（awareness）を重ねて、力強くなっていく過程を描いた、と語った。

フーシェは、白人女性作家が黒人女性のことを書くことについて「自分たちのことを白人たちは知らない」としながらも、週に２度１年間インタビューを続けたマーシックを評価して、この劇を認め参加したと語った。若い女優ローデスに対して、異人種間恋愛に関する質問が出ると、それを受け入れるかのように劇場に集う聴衆たちも彼女と一緒に歌い出す場面があったことを説明した。

マーシックに対して「貴女のことについて話して」という質問が出ると、「出会う女性たちが大変興味深かったので、楽しくユーモアにあふれた作品ができた」として、女性というより人間として、全ての人たちが家族を持つ。その全ての人とは、外国人も含む、中国人であろうとオーストラリア人であろうと、皆家族を持つことは同じで、その思いが舞台によい相性（chemistry）を起こすのだと説明した。「どのようなエネルギーもそこから生まれる」「そう、私たちは皆家族だから！」と結んだ。この言葉は「シスタス」の最後に歌われる♪We are familyで表現される。

舞台の脇で、キーボードを担当する白人男性がいるのだが、彼を姉妹の兄弟として設定することも考えたが、会話に大きな変更が必要になるので、彼はそのまま黒子として音楽担当をしてもらったとも語った。「白人女性の視点から言っても、人種は非常に重要な観点だと思う」として、黒人兄弟の妻として、義理の妹に白人女性を１人加えたことも説明した。この白人女性ヘザーの存在が、この劇に深みを出していた。

聴衆からの最後の質問は、黒人女性から出された。劇で表現される黒人女性たちの人生は、決していい経験をしていると思えないし、歌われる歌も決して幸せな歌ではない、むしろ苦しい歌が多い。喜びとは思えないことも、楽しく歌っているなど多くの疑問を呈したのだった。マーシックは「とても興味深い議論する価値がある質問だ」とは言ったが、結論には言及しなかった。

講演会を閉じようとすると、会場から１人の男性が、ローデスが劇中で歌った♪I Have Nothingに感激したので、ここでも歌ってほしいと頼んだが、「どうかショーを見に来て！」と笑顔で答えてお開きとなった。確かに、今は亡きホイットニー・ヒューストンの大ヒット作がローデスによって絶唱されたとき、会場は割れんばかりの拍手が鳴りやまなかった。

「シスタス」をめぐる議論に加えて、「奇妙な果実」が効果的に歌われたブロードウェイ・ミュージカルをもう一つ紹介しておきたい。20世紀末の1999年、トニー賞作品賞など５部門の候補となった作品、*It Ain't Nothin' but the Blues* である。1994年にコロラド州デンバーで最初に作られ、1996年には首都ワシントンで公演し、ニューヨークに進出したミュージカルである。1999年３月にオフブロードウェイで期間限定の公演だったが、人気を呼んだため４月からはリンカンセンターのヴィヴィアン・バーモント劇場で、さらに劇場を変えて2000年１月まで284公演も続けたのだった[37]。

白人歌手２人を含む７人の男女が、ブルースの歴史を歌で綴っていく内容で、舞台の背景には、歌に合わせながらアメリカ黒人史にとって重要な絵（奴隷船船底に「積み荷」として並べられたアフリカ人）や写真（綿畑の様子など）が効果的に映し出された。劇もいよいよ終盤、最後の曲を紹介する黒人男性歌手が登場して「ミシシッピは心の故郷…でもミシシッピなんてくそくらえ」と吐き捨てるように言った後、最後の曲が「奇妙な果実」であることを告げた。看板黒人女性歌手が熱唱した後、背景にはリンチで木に吊され奇妙な果実となった２人の黒人男性の写真が映し出された。すでに2.2の註17で言及した通りである。

ビリーの「奇妙な果実」は、こうして効果的にブロードウェイの舞台で歌われ続けているのだった。

3.3　演劇「レディ・デイ」(Lady Day at Emerson's Bar & Grill: 2015)[38]

この演劇は、1959年３月の真夜中、サウス・フィラデルフィアの場末にある小さなバー、エマソンズ・バー＆グリルで開かれた２時間のショーを描いている。劇作家ラニー・ロバートソンは、この劇を書いた理由をこのように語っている。

「友達の１人が、亡くなる３ヶ月前最晩年のビリー・ホリデイのショーを観たことを話してくれた。場末のバーでピアノの上には酒が置いてあり、ビリーはふらつきながら舞台に立ち、酒を飲み続けながら歌った。途中愛犬のチワワ、ペピを抱えて歌い、つまずくこともあった。常連客７人という聴衆のために10曲から12曲を歌ったという。この友人の話を聞いて、世界的に最も偉大なジャズ歌手だと思っていたビリー・ホリデイが、最晩年にはこんな状態で歌っていたことを聞いて、私はいつもそのイメージに恐怖を覚えた。この *Lady Day at Emerson's Bar & Grill* を書くことで、私の中からビリーの幽霊を追い払いたかったのだと思う」[39]と。

1986年に書かれた脚本で、同年４月にはアトランタの劇場で初演され、６月にはオフブロードウェイで上演された。1987年５月まで全281公演が行われた[40]。この公演でビリーの役を演じた黒人女優はロネッタ・マッキー[41]だった。28年ぶりに、オードラ・マクドナルドを主演にブロードウェイ上演となったのである。

『レディ・デイ』で特筆したい場面を数カ所紹介しておく。♪WHEN A WOMAN LOVES A MANを最初に歌った後、「またフィラデルフィアに来られて嬉しいわ」と挨拶してバンドメンバーを紹介しながら次々持ち歌を歌っていった。途中でテーブルにのせたグラスに酒をつぎ飲み始めた。酒を飲みながら、自分の人生を語るのだった。確執のあった母親に対する複雑な想い、先達のルイ・アームストロング（サッチモ）やベシー・スミスへの敬愛する気持ちなどが語られた。ベシーの持ち歌を歌った後、「ベシー・スミスはブルース歌手、私はブルース歌手じゃない、ジャズ歌手よ」と自らを位置づけもした。

劇も後半になると、随分酔ったレディ・デイは、南部の劇場で受けた人種差別経験について語り始めた。ヴァジニア、ジョージアなど南部あちこちの劇場で歌ってきたうち、中でもアラバマ州バーミンガムでのエピソードだった。ステージで歌うことはできても、トイレは

白人用トイレを使えないばかりか、黒人女性用トイレがないと言う白人女性店員とのやりとり途中、トイレに行く前に彼女の前で用を足してしまったことを、大声で笑いながら説明した。

そのあと、♪STRANGE FRUITを絶唱したのだった。絶唱の後、そのまま楽屋へ帰り、戻ることはなかった。司会者が「レディ・デイは必ず戻るから、しばらく新曲を聴いて待っていてほしい」とピアノを弾き出した。いわゆる幕間となったあと、レディ・デイは愛犬のチワワを抱いて舞台に戻ってきたのだった。泥酔した状態で数曲歌い、♪DEEP SONGを最後に舞台は真っ暗になり終演となった。拍手喝采が続いた後、明るくなった舞台での、オードラ・マクドナルドは、素の表情で会場の拍手に応えた。ここで素の顔を見ることで、先程までの２時間近い見事な演技を筆者は改めて実感することができた。

この演劇の舞台、サウス・フィラデルフィアのショーから４ヶ月後の1959年７月17日金曜日、ビリー・ホリデイはハーレムの病院で死亡した。44歳だった。

ビリーは昏睡状態になった1959年５月31日に、救急車で運ばれ、父親同様病院をたらい回しにされるうちに、点滴で身動きがとれない状態になった。にもかかわらず、麻薬所持を看護師に密告されて、逮捕状を持った警官が死の床のそばに立っていた。快復し次第逮捕するためだったが、結局そのままビリーは帰らぬ人となった。一人の黒人女性、エリノーラ・フェイガンとして人知れず亡くなっていったのだった。

2014年６月８日日曜日の夜（米国東部時間）、ニューヨーク市マンハッタン区にあるラジオシティ・ミュージックホールにおいて、第68回トニー賞授賞式が開催され、CBSから日本を含む全世界に生中継放送された。ブロードウェイ・ミュージカル及び演劇の１年間の集大成となるこの式典で、１人の黒人女優が偉大な記録を作った。オードラ・マクドナルドが、史上初のトニー賞６冠を達成して、ミュージカル部門と演劇部門の二つの領域で、それぞれ助演と主演の女優賞を獲得したのだった。今回受賞した演劇部門主演女優賞受賞スピーチで号泣しながら、オードラは次のように語った。

「この受賞は多くの先達たちの功績のお陰です。勇気ある（黒人）女性たちに敬意を表します。たとえば、レナ・ホーン、マヤ・アンジェロウ、ダイアン・キャロル、ルビー・ディー、ビリー・ホリデイです。この賞を特にビリーに捧げます」と。ここに名前が挙がった黒人女優たちのうち、マヤ・アンジェロウは、授賞式から10日程前に亡くなった。ルビー・ディーは、この時点では訃報が聞かれることはなく、この式典から数日後に亡くなったのだった。ブロードウェイ演劇には欠かせない黒人女優だったので、名前が挙がったのだろう。

４．ドキュメンタリー“Billie”から映画“THE UNITED STATES vs. Billie Holiday”へ

4.1　ドキュメンタリー“Billie”（2019）

2019年７月に都内で、ビリー・ホリデイに関するドキュメンタリー映画*Billie*[42]が公開された。イギリスで制作された98分間である。公式HPのポスターキャッチコピーは「20世紀最高のシンガーは、誰よりも優雅で、誰よりも孤独だった」として、英文では“BILLIE―She sang the truth, she paid the price.”となっている。1970年代にリンダ・リップナック・キュールがオーディオカセットに録音したインタビューに基づいて構成されたドキュメンタリーである。ジェイムス・エルスキン監督がキュールのカセットテープの権利を買い取り、脚本も手がけて制作された。

1940年生まれのユダヤ人女性キュールは、ニューヨークで高校教師およびフリーランスジャーナリストをしながら、ビリー・ホリデイの伝記を書くために関係者200人（家族、友人、音楽仲間などのビリーの人生に関わった人々）へのインタビューを繰り返していた。その途中の1978年に、取材中の首都ワシントンで、38歳で謎の死を遂げた[43]のだった。

ワシントンでビリーのかつてのバンドリーダーだったカウント・ベイシーのコンサートを見た後、ホテルの部屋から飛び降り自殺したと警察は判断した。だが遺族は、誰かに殺害されたと信じているという。ビリーに関するインタビュー行為が原因でもし殺害されたのなら、それはなぜだろう。ドキュメンタリー*Billie*でも、その疑問は素直に表現されていた。回答の一端は、次節4.2で議論する『麻薬と人間』およびその第１章の映画化となった4.3での議論、映画“THE UNITED STATES vs. Billie Holiday”で類推できるのかもしれない。

1960年代後半から1978年まで10年間録音され続けた、キュールが残した125本の200時間以上に及ぶ録音テープは、その後伝記作家たちによって閲覧され、伝記記述に生かされることになった。たとえばヨハン・ハリは伝記作家ブラックバーンによる伝記を引用しながら「ジミー・フレッチャーについてのこの記述の原点を確認したかったが、彼に関する唯一の出典はリンダ・ク（マ）ール（マ）によるインタビューだけだった」[44]と、脚注に記している。改めて次節以降で検討する。

キュールによる伝記は未完のまま、インタビューテープも埋もれたままになるはずだった。エルスキン監督によるドキュメンタリーのみが、キュールの仕事を世に問うことになった。彼女の調査によれば、ホリデイが、暴力、女嫌い、人種差別という人生を送ったことで、麻薬依存症になったとしている。ブロンクス生まれの白人女性キュールは、比較的経済的には成功したジャーナリストだった。ビリー同様に早世したキュールを、エルスキン監督は、ビリーと似た人生だったように描いていた。

インタビューに応じたのは、トニー・ベネット、カウント・ベイシー、アーティ・ショウ、チャールズ・ミンガス、カーメン・マクレエという錚々たるアーティストから、ビリーのいとこや友人、ポン引き、彼女を逮捕した麻薬捜査官、刑務所の職員まで多岐にわたる。「彼らの生々しい証言と、珍しいホーム・ムービーや過去の資料映像、秘蔵の写真によって謎に

満ちたビリーの人生がまるでサスペンス映画のように解き明かされていく」[45]とHPは説明する。本稿の重要なテーマとした名曲「奇妙な果実」を歌うスタジオでのビリーの歌唱場面は、最新技術を駆使したカラー映像となって甦っていた。

公式HPには、日本人批評家たちからのコメントもある。映画評論家の町山智浩は「国家権力と戦ったビリー・ホリデイこそブラック・ライブス・マターの原点！」と絶賛し、音楽評論家で作詞家の湯川れい子は「まさか［没後］62年も経って『奇妙な果実』を歌うビリーを、こんなに生々しく、色がついた見事な映像［下線は筆者］で聴ける日が来るなんて、ビリーが他界したと知った時以上の強烈なショックだった。この映画を見た夜は、眠れなかった。（中略）ものすごく好きで、良く知っていたつもりで生きて来たけれど、何も知ってはいなかったと知った夜だった」[46]と語っていた。

4.2 『麻薬と人間』（Chasing the Scream）にみるビリー・ホリデイ

イギリス人ジャーナリストのヨハン・ハリが、2015年に出版した著書 *Chasing the Scream: The First and Last Days of the War on Drugs* は、世界各紙でベストセラーとなり、18カ国で翻訳された。日本版『麻薬と人間―100年の物語 薬物への認識を変える衝撃の真実』（2015年）では「補章 日本の『麻薬戦争』と“麻薬神話”」付きで出版された。「日本古来の大麻文化を取り戻したい!!」と笑顔で写る故安倍晋三の昭恵夫人[47]が痛々しい。

著者ヨハン自身が薬物依存症だった、また身近な縁者たちもコカインやヘロイン中毒だったなどの個人的経験から、「薬物戦争」に興味を持ち、３年かけて９カ国に取材した記録が本書となった。歴史をたどるために、18世紀末から19世紀初めに生まれた薬物依存症のビリー・ホリデイ、彼女を追い詰めるハリー・アンスリンガー（連邦麻薬局長）、麻薬密売を手がけたアーノルド・ロススタイン（ギャングのボス）という三者を対象として、話は展開される。

「はじめに」は「“麻薬戦争”が始まって百年、そこには想像もできない物語があった」[48]とタイトルが付いた。原書出版から100年前の1914年に、初めてヘロインとコカインなどの麻薬を禁止した「ハリソン法」が制定されたことを意味しているらしい。つまり、薬物戦争はアメリカ合衆国から始まったために、ヨハンの取材はニューヨーク行きから始まったという。

麻薬戦争とは、アメリカが麻薬の撲滅を決め、禁止された薬物の製造と流通を取り仕切るギャングから末端の密売人、薬物の使用者たちまでを巻き込んだ混沌とした戦争状態を意味する。その麻薬戦争を始めたのは、1930年設立の連邦麻薬局（後のDEA・麻薬取締局）の初代局長ハリー・アンスリンガーだった。５代に渡る大統領下で32年間麻薬局に君臨し、麻薬戦争をアメリカから世界にまで波及させた。その取り締まりに大きな問題があったことを明らかにしたのも本書である。

本稿はビリー・ホリデイをめぐる論考のため、本書を議論する紙幅はない。ビリー・ホリデイに関する部分は、第Ⅰ部“麻薬戦争”の始まり第１章アメリカVS.ビリー・ホリデイで、

翻訳では50頁分ある。この章題がそのまま、次節で議論する映画タイトルとなった。

前節での議論、リンダ・リップナック・キュールによるインタビューをめぐって、ヨハンが伝記作家ブラックバーンによる伝記を引用しながら「ジミー・フレッチャーについてのこの記述の原点を確認したかったが、彼に関する唯一の出典はリンダ・クール（マ・マ）によるインタビューだけだった」と本稿註44に記したことを再度確認したい。

ジミー・フレッチャーとは、ハリー・アンスリンガーの部下職員で黒人だった。フレッチャーという黒人職員の存在自体が不確定で、大きな議論になっていたが、キュールのインタビューに応えたという事実が明らかになり、その存在が確信されたのだった。映画でも、重要な役回りをしているが、これは次節とする。

フレッチャーの存在に関して、ヨハンは次のように説明する。「ハリーは、この人気上昇中の黒人の期待の星がヘロインを使っているという噂を聞きつけ、ジミー・フレッチャーという職員にビリーの一挙手一投足を監視させることにした。ハリーは黒人を使いたくはなかったが、ハーレムとボルティモアに白人を送り込んだら、あっという間に注目を浴びることは確実だった。その点、ジミーはうってつけだった。彼の仕事は同じ黒人を逮捕することだったが、アイスリンガーは、我が局で黒人が白人の上に立つことはあり得ないと断言した。ジミーが局の建物に入ることは認められていたが、階上に上がることは許されていなかった。彼は『覆面警官』で、昇進しないことになっていた」[49]と。

1930年代から40年代に、黒人職員が中央局の大事な役職に就くことはありえなかった[50]。上記引用にある「階上に上がることは許されていない」という部分が象徴的で、南北戦争終了後、再建期を経たアメリカ南部では、黒人を社会的、政治的に隔離することが当然だった。中央局は首都ワシントンにあるとは言え、首都は南側のポトマック側を挟んで、南部連合の首都だったリッチモンドを持つヴァジニア州に隣接し、共に首都建設時に土地を提供した北側のメリーランド州も、北軍の１州とは言え、黒人に対応する文化的土壌は南部と同じだった。

では、連邦麻薬局とビリーの関係を、映画を通して見ていこう。

4.3　映画“THE UNITED STATES vs. Billie Holiday”（2021）

『麻薬と人間』邦訳本の著者紹介には、以下のように映画化が予告されている。「本書を原作として、ハリウッド映画『THE UNITED STATES vs. Billie Holiday』（邦題未定）が制作され（2021年公開予定）、大きな話題となっている。監督はリー・ダニエルズ（アカデミー賞受賞の映画『プレシャス』[51]を監督）」と。

リー・ダニエルズ監督は黒人男性でゲイを公表し、長年LGBTQIAの支援者でもある。黒人女優ハリー・ベリーが、2001年に史上初のアカデミー賞最優秀主演女優賞を獲得した映画『チョコレート』（Monster's Ball: 2001）のプロデューサーでもあり、この作品がダニエルズ監督を有名にした。筆者拙著で議論した『プレシャス』だけでなく、実在したホワイトハウスの黒人執事を描いた『大統領の執事の涙』（The Butler: 2013）も監督した。執事役は、黒人俳優フォレスト・ウィテカーが演じた。『ラストキング・オブ・スコットランド』（2006）

でウガンダ元大統領イディ・アミン役を演じてアカデミー主演男優賞を受賞した。最近では、ジョニー・デップ主演映画『L.A.コールドケース（City of Lies）』[52]（2022）で「相棒」ジャクソン役を演じた。

ダニエルズ監督は、ビリーのことをローザ・パークスたち公民権運動家と変わらない、体制に負かされることがなかった女性だったと語り「タフで、最高にイカしていて、真のヒーロー」[53]と表現した。本作に込めたメッセージは「政府が労働許可証を奪って歌えなくしても、彼女はひるまず歌うことをやめなかった。リーダーとは、姿、体格、皮膚の色は関係ない。観客には自分にも世の中を変えられることを知ってほしい。ビリーが自分なりのやり方で行ったように」とも。

アメリカの雑誌*Variety* のインタビューに応えたダニエルズ監督は、さらに次のようにも語っている。「何世紀にもわたって続いてきた黒人差別と社会的不公正という問題を直視するためには、ビリー・ホリデイがいかに連邦麻薬局のターゲットとされ死に追いやられたかという、歴史の闇に隠蔽されてきた問題に光を当てることが必要です。知られざる公民権運動の闘士としてのビリー・ホリデイの人生と芸術を描きたい」[54]と。

映画タイトル『ザ・ユナイテッド・ステイツ vs. ビリー・ホリデイ』は、原作章題であることはすでに説明した。国家による個人への執拗ないやがらせに焦点を当て、対峙すべき相手は、アメリカ合衆国であることは明らかだが、これは裁判法廷で読み上げられた表現でもあった。裁判の名称は通常「原告 対 被告」[55]の列挙となる。つまりビリーは被告だった。自伝第17章「前後を忘れて（Don't Know if I'm Coming or Going）」冒頭の一部を引用[56]する。

それは「合衆国対ビリー・ホリデイ」とでもいったらぴったりするような感じのできごとであった。私は、（中略）地方裁判所の法廷に引っ張り出された。（中略）起訴状が読みあげられた。―1947年５月16日前後、ペンシルヴェニア東地区において、ビリー・ホリデイは麻薬をうけとり、隠匿し、運搬し、又運搬及び隠匿を幇助した。該麻薬は密輸入せられたる故を以て、USCAの第21条174項に違反するものである―

この場合、原告は「合衆国」となっているが、アンスリンガー麻薬局長その人である。麻薬局と彼女の戦いは「合衆国 vs. ビリー・ホリデイ」と呼ばれ、ここからアメリカの麻薬戦争は始まったといってもよかった。白人にとって都合の悪い「奇妙な果実」を彼女が歌うことを禁じたが、ビリーは歌うことで抵抗した。歌を止めないビリーを、薬物使用で逮捕する方法を選んだのである。

ダニエルズ監督の言葉通り「世の中を変えようとした」ビリーの役を演じたのは、1984年ワシントン州生まれの芸名アンドラ・デイだった。デイは、ビリーの苗字をもらったというシンガーソングライターで女優、初めての主役でゴールデングローブ賞最優秀主演女優賞を獲得し、アカデミー賞候補にもなった。映画インタビューに応えてアンドラは、ビリーを「公民権運動の始まりのひとり」と表現した。「自分の行いに悪びれず、黒人のために闘った」女性だと断言した。

アンドラは、ダイアナ・ロス主演映画『ビリー・ホリデイ物語』のファンではあったが、

撮影当時1970年代初期にはフーバーFBI長官も、アンスリンガーもまだ権力を持っていたことを考え、あのような映画になったことは仕方ないと判断しているようである。ただ、今こそ「彼女を真に理解し、自分たちの歴史を理解することが必要」[57]と語っている。「奇妙な果実」を生で歌う場面を、「痛みを伴う体験」として「彼女、私の両親、今でも様々な理由から闘い続ける人々に対する感謝の気持ちがわいてきた」とも…。

ビリーに仕掛ける麻薬局からの「罠」の役目としたジミー・フレッチャーという麻薬局黒人職員は、映画では、ビリーを現行犯逮捕することで黒人初の連邦捜査官へと出世したとされた。「麻薬から黒人社会を救う」という理想があったジミーだったが、母親から「あの歌を歌う勇気のある黒人は他にいない」と責められ、ビリーの親友から彼女の生い立ちを聞かされるうち、自らの行為を悔いるのだった。アンスリンガーからさらなる命令を受けたときには、ビリーの味方になり、逮捕されないよう忠告するようになり、ジミーの証言で、ビリーの容疑も晴れたのだった。

アンスリンガーの指示でジミーは、全米ツアーに旅立ったビリーを追いかけるが、もう「罠」の仕掛け人としてではなく、ビリーへの愛と憧れのために行動していた。ちなみに、このジミー役を演じたのは、アカデミー賞作品賞を受賞した『ムーンライト』（Moonlight: 2016）で主人公の大人役をしたトレヴァンテ・ローズだった。

南部ツアーの途中で黒人リンチを目撃する場面では、ジミーと一緒に見たことになっていた。『ビリー・ホリデイ物語』でダイアナ・ロスが、リンチされ吊された黒人男性を目撃する場面があったが、1972年時点での表現で、きれいごとでしかなかった。もちろん、その場面の直後、ダイアナ・ロスの「奇妙な果実」が画面全体に広がりはしたが…。

BLM運動が徹底した21世紀の現在では、あの程度ではすまず、リンチ場面ではダニエルズ監督の想いが十分に表現されていた。映画でも、この場面の後「奇妙な果実」を熱唱したのだった。実際に、1949年にビリーは南部ツアーで「奇妙な果実」を歌い、メディアからは「KKKに抵抗、南部で勇気ある行動」と讃えられたのだった。この場面の撮影でアンドラが感じたことに関しては、すでに言及した通りである。

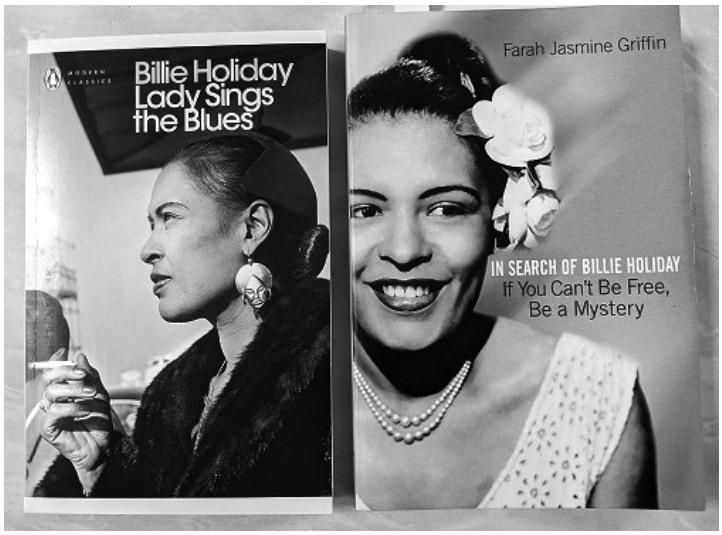
ダイアナ・ロスからバトンを渡されたアンドラ・デイは、ビリーはもちろん、ダイアナにも敬意を表しながら、自分なりの「ビリー・ホリデイ」を作り上げたことだろう。ドキュメンタリーで「奇妙な果実」を歌うスタジオでのビリーを目撃したとき、音楽評論家の湯川れい子氏同様に、筆者も衝撃で立ち上がれなかった。同じ歌を歌うダイアナからは感じなかったビリーの「怨念」のようなものを、アンドラからは感じられ、ダイアナの映画から半世紀過ぎた現在、芸能界も世界も表現が自由になったことを実感した。観客側も、映像からのメッセージを時代の流れとからめて理解する力を持つ必要があるとも考えた。

5．おわりに

ビリー・ホリデイが1959年に44歳で亡くなってから、本稿執筆2022年時点ですでに63年を迎える。1972年公開のハリウッド映画『ビリー・ホリデイ物語』から半世紀が経ち、ここ数十年間で、ブロードウェイに至るまでの全米各地での演劇公演、さらにこの数年間でのドキュメンタリーだけでなく、新たなハリウッド映画『ザ・ユナイテッド・ステイツ vs. ビリー・ホリデイ』公開と、ビリー・ホリデイ「健在」を確信させる状況である。

自伝とは名ばかりで、白人コラムニストのウィリアム・ダフティによる「自伝」には、事実と異なる箇所が散在することはすでに言及した。そのために「伝説」となり、伝記作家たちを悩ませ続けてきた。本稿参考文献一覧だけでも10冊の伝記があり、その６冊は日本語に翻訳された。日本語で読む読者には、その範囲での理解に留まってしまう。

黒人女性史研究者の筆者としては、彼女の歌唱批評、彼女の人生評価だけに収まらず、アメリカ黒人女性史に位置づける必要がある。その視点から書かれた伝記が、参考文献一覧15番の黒人女性研究者のファラ・グリフィンによる *If You Can't Be Free, Be a Mystery: In Search of Billie Holiday*[58]［下掲写真右側］だった。しかも、黒人女性歴史家たちの論文や書籍[59]を引用して、ブラック・フェミニストとしての立場を明らかにしていた。



Books on Billie Holiday

グリフィンが引用した黒人女性史家たちの論文は、1980年代末の業績で、1990年刊行の史料集にも収録された。2.1で検討したハインによる通史や、アンジェラ・デイヴィスの著作のように、正面からビリーを扱ったわけではないが、「ブラック・フェミニスト」批評の視点が、ビリー・ホリデイの人生そのものに表現されていることを裏付けたものだった。

日本人の友人の一人から手紙で「若い頃、ビリー・ホリデイの歌う『奇妙な果実』の歌詞

に、ものすごい衝撃を受け、それが差別や暴力に目を向ける契機となった」と告白されたのは２年前、コロナ禍真最中のことだった。直後、ビリー・ホリデイを扱った新しい映画公開の情報も得た。ジャズを愛する日本の一般人にとって、ビリー・ホリデイという歌手は特別な存在であることを自覚した。さらに彼女が、単なるジャズ歌手ではなく差別や暴力に立ち向かう活動家に値する存在であったこと、彼女なりの方法（歌唱）で活動したことを確信した。

学部卒業後９年目に大学院進学を目標として、修士論文のテーマを探していた筆者が、アメリカ女性の中でも白人ではない黒人を探して、最初に出会ったアメリカ黒人女性、アイダ・B・ウェルズ[60]は、南北戦争後、南部解放黒人に向けられたリンチに立ち向かったジャーナリストだった。21世紀を迎えて、警察官からの暴力が白日にさらされ、世界中にBLM運動が拡散した。筆者にしてみれば、20世紀転換期にウェルズが「孤独な闘士」（Lonely Warrior）として、闘い続けた南部白人による黒人リンチ反対運動こそ、BLM運動の原点だと考えている。

1939年に勇気を持ってビリー・ホリデイが「奇妙な果実」を歌ったことは、リンチ現場へ取材して、リンチの理由とされた「黒人男性による白人女性への暴行」は、事実無根であったことをペン１本で主張したアイダ・B・ウェルズの活動に通じると確信する。そのウェルズが2020年に「ピュリツァー賞死後特別賞」を受賞したことを知った。

「1890年代後半、命がけでリンチの恐怖を暴いた調査報道ジャーナリスト、アイダ・B・ウェルズは、何世代にもわたりジャーナリストを勇気づけてきた彼女の力強い報道が評価され、2020年５月４日、ピュリツァー賞の死後特別賞を受賞」と報道された。表彰にあたりピュリツァー賞選考委員会は「リンチが行われていた時代のアフリカ系アメリカ人に対する恐ろしく悪質な暴力について、傑出した勇気ある報道」として、ウェルズをたたえ、受賞と共に５万ドルが遺贈され、受取人は後日発表予定とのことである。選考委員会は、世界報道自由デイの翌日にこの栄誉を発表、ウェルズの遺産は多くの人に対し、報道の自由とは何かを明確に示している[61]、とメディアでは伝えている。

21世紀に入り20年余りが過ぎた現在、ジャズ歌手ビリー・ホリデイも、反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズも、改めて高い評価を得て、ジェンダー、人種、階級、宗教など、複雑に入り組んだ世界の人々に問題提起をしているのだろう。時代も国籍も人種も超えた、アメリカ黒人女性たちからの「語り継ぎ」に、今こそ耳を澄ませるときなのであろう。

註

1　この歌詞は拙著「差別への怒りを♪奇妙な果実 に託して［ビリー・ホリデイ物語］」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年）p.81で筆者が全訳した一部を転載した。手元のCD歌詞カードが不十分だったため、1999年当時手元の伝記にあった歌詞を拙訳した。John White, *Billie Holiday: Her Life and Times*, Spellmount Limited, 1987. Omnibus Press, 1988. p.50. 同書掲載歌詞の最後の単語はfruitだが、CDに録音されたビリーの歌ではcropだった。

2　南北戦争（1861-1865）で南部の敗戦が決まって、北部白人によって南部再建（reconstruction; 1877年中止）が始まった。南部白人には屈辱の極みであり、その怒りは解放黒人に向けられた。政治的、経済的差別以上に、黒人達に向けられた肉体的行為、いわゆる黒人リンチが始まったのだった。

3　ビリー・ホリデイに関する拙稿は、本稿最後の参考文献リストに拙稿一覧を加えたが、ここでは次を参照されたい。岩本裕子「差別への怒りを♪奇妙な果実 に託して［ビリー・ホリデイ物語］」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年、以下『スクリーン』と略記）pp.72-84.；岩本裕子「ダイアナ・ロスと『ビリー・ホリデイ物語』」『語り継ぐ黒人女性』（メタ・ブレーン、2010年、以下『語り継ぐ』と略記）pp.110-115.

4　G. T. Hull, P. B. Scott & B. Smith, eds., *All the Women Are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave: Black Women's Studies*, (New York: The Feminist Press, 1982)

5　Deborah Gray White, ed. *Telling Histories: Black Women Historians in the Ivory Tower*, (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2008)

6　D. C. Hine, ed., *Black Women in United States History*, 16 vols., (Brooklyn, N.Y.: Carlson Publishing Inc., 1990)

7　*Black Women in America: An Historical Encyclopedia, 2 vols*. editors Darlene Clark Hine, Elisa Barkly Brown and Rosalyn Terborg-Penn (Brooklyn, NY: Carlson Publishing, Inc.,1993); *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, editor Darlene Clark Hine (NY: Facts on File, Inc., 1997); *BLACK WOMEN IN AMERICA: SECOND EDITION*, 3 vols. Editor in chief Darlene Clark Hine, Oxford University Press, 2005.

8　Susan C. Cook, "HOLIDAY, BILLIE (1915-1959)", BWA, vol.1, pp.565-569.

9　https://music.wisc.edu/faculty/susan-c-cook/（2022/09/05閲覧）

10　Susan C. Cook, "Billie Holiday" Music: Facts on File Encyclopedia of Black Women in America, editor Darlene Clark Hine（NY: Facts on File, Inc., 1997）pp.137-142.

11　Susan C. Cook, "Billie Holiday" *BLACK WOMEN IN AMERICA*, 2nd ed. editor in chief, Darlene Clark Hine, vol.3, Oxford Univ. Press, 2005, pp.66-69.

12　Darlene C. Hine and Kathleen Thompson, *A Shining Thread of Hope: The History of Black Women in America*, (New York: Broadway Books, 1998) pp.242, 259-260, 269.

13　Analysis of the Live Recordings by Malcolm Nicholson「ライヴ・レコーディング分析（1948-1959）」in Stuart Nicholson, *Billie Holiday*, Northeastern, 1995. スチュアート・ニコルソン、鈴木玲子訳、大和明監修『ビリー・ホリデイ―音楽と生涯』日本テレビ放送網、1997年８月、p.520.；ここに列挙された10曲に♪Strange Fruitが含まれていないことは興味深い。歌う会場は限られて、大きなライヴ会場では歌われなかったということだろう。

14　マリアン・アンダーソンに関しては、以下の拙稿を参照されたい。「マリアン・アンダーソンのためのコンサート」『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）：絶望から希望へ』（明石書店、2013年）pp.173-175.

15　A. Y. Davis, *Blues Legacies and Black Feminism: Gertrude "Ma" Rainey, Bessie Smith, and*

Billie Holiday,（New York: Vintage, 1998）pp. xviii, xx, 30, 57, 72, 161-97.

16　ビリー・ホリデイ、油井正一＋大橋巨泉訳『奇妙な果実―ビリー・ホリデイ自伝』晶文社、1971年２月初版、1987年７月26刷、pp.53-54.

17　https://en.wikipedia.org/wiki/Lynching_of_Thomas_Shipp_and_Abram_Smith（2022/9/11閲覧）
本稿3. 2で言及するミュージカル　It Ain't Nothin' but the Blues（1999）でも「奇妙な果実」が歌われた直後に、この写真がステージに映し出され、観客は絶句したものだった。

18　自伝初版でAllenと誤記されたために、参考文献リストの12番までは「アレン」と訳されている。13番の第２章註５では「正しくはLewis Allanだが、Lewis Allenと誤記する例が多い」と記していて14番以降の文献では「アラン」に訂正されている。ちなみに、2. 1で検討した黒人女性百科事典、及びハインの概説書では「Allan」と表記されている。誤記の理由は不明だが、デイヴィスは、本文でAllenのままで議論し、索引もAllenとなっている。

19　生野象子『ビリー・ホリデイとカフェ・ソサエティの人びと―「奇妙な果実」の時代をたずねて』青土社、2020年10月、pp.42-57.

20　デーヴィッド・マーゴリック、小村公次訳『ビリー・ホリデイと《奇妙な果実》“20世紀最高の歌”の物語』大月書店、2003年４月、pp.39-40, 43-54.

21　拙稿「奇妙な果実という一大出世作」『スクリーン』pp.80-82.

22　「訳者あとがき」ビリー・ホリデイ、油井正一＋大橋巨泉訳『奇妙な果実―ビリー・ホリデイ自伝』晶文社、1971年２月初版（1987年26刷）p.307.

23　『奇妙な果実―ビリー・ホリデイ自伝（晶文社クラシックス）』晶文社、1998年１月。初版の大和明「ビリー・ホリデイの人と芸術」には27年分の「改訂追補」がついた。ビリーの作品に関する詳細な説明だけでなく、自伝出版以降の伝記（研究書）に関しても詳細に説明が加えられ、20世紀のビリー・ホリデイ研究史が整理された。さらに「ビリー・ホリデイの生涯」として、時系列の細かい年表も付いた。大和明はニコルソン『ビリー・ホリデイ―音楽と生涯』の監修者でもある。

24　上記した大和明による「監修者あとがき」p.528.

25　John Chilton, *Billie's Blues: Biography of Billie Holiday*, Quartet Books, 1975.

26　https://www.pinterest.jp/pin/484488872408207291/（2022/09/19閲覧）
アメリカ合衆国では毎年郵便記念切手を発行している。その切手を入れた郵便絵葉書も発行されたようで、アメリカで購入した方から折に触れ筆者に送って頂く。手元には黒人女性歌手限定で、ビリー・ホリデイ、マ・レイニー、ダイナ・ワシントン、クララ・ウォードの４枚である。

27　チルトン『ビリー ホリデイ物語』p.13.

28　ニコルソン『ビリー・ホリデイ―音楽と生涯』pp.24-25, 515, 516.

29　筆者と似た結論（「おわりに」で言及）を論じた評伝の存在を教えてくれたのは、日本アメリカ史学会年次大会（2022/9/18開催）シンポジウム「黒人自由闘争を再考する―BLM運動からの視座」のパネラーの一人、山田優理氏だった。記して深謝する。Farah Jasmine Griffin, *If You Can't Be Free, Be a Mystery: In Search of Billie Holiday*, Simon and Schuster, 2001.

30　本節は以下を一部引用して加筆修正した。拙稿「差別への怒りを♪奇妙な果実 に託して［ビリー・ホリデイ物語］」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年、以下『スクリーン』と略記）pp.72-84.

31　1950年代を代表するグラマー女優と言われた。1954年には黒人女優として最初の主演女優賞候補となった。作品は「カルメン」（CARMEN JONES）であった。ビゼーの歌劇「カルメン」を黒人オールキャストで映画化したもので、ブラウン判決が出された年の作品だと考えると、異色とも言えるミュージカル・ドラマだった。ハリウッド俳優の誇りの象徴とも言える路上の星マークに

もドロシー・ダンドリッジの名前を残している。

32　ジェームズ・ボールドウィン（山田宏一訳）『悪魔が映画を作った』（時事通信社、1977年）p.213. 原題は *The Devil Finds Work* である。

33　映画パンフレット『ビリー・ホリデイ物語』（1972年）；拙稿「奇妙な果実という一大出世作」『スクリーン』pp.80-82.

34　拙稿「レディと呼ばれた人間としてのプライド」『スクリーン』pp.76-79.

35　ジェイムス・バーネット、塩川由美訳『ビリー・ホリデイ』音楽之友社、1986年６月、pp.55-56；拙稿「映画と実人生のギャップ―麻薬問題」『スクリーン』pp.83-84.

36　本節は以下を一部引用し、加筆修正したものである。拙稿「ミュージカル『シスタス』にみるウーマンフッド」『津田塾大学紀要』第46号、2014年、pp.267-291.

37　https://en.wikipedia.org/wiki/It_Ain%27t_Nothin%27_But_the_Blues（2022/09/23閲覧）

38　本節は以下を一部引用し、加筆修正したものである。拙稿「アメリカ演劇における黒人女優：マヤ・アンジェロウ、ルビー・ディーからオードラ・マクドナルドへ」『浦和論叢』第52号、2015年、pp.1-29.

39　Lanie Robertson, “WHY I WROTE THE PLAY” in the brochure of Lady Day at Emerson’s Bar & Grill, p.17.

40　https://en.wikipedia.org/wiki/Lady_Day_at_Emerson%27s_Bar_and_Grill（2022/09/23閲覧）

41　Farah Jasmine Griffin, *If You Can’t Be Free, Be a Mystery: In Search of Billie Holiday*, Simon and Schuster, 2001, p.209n97. 註29にリタ・ダヴの名前が出る。ビリー・ホリデイを題材とした芸術作品を列挙した註の内、詩、小説、自伝（マルコムＸやマヤ・アンジェロウ）、エッセイ、映画などの他に演劇を紹介する。本文p.152で網羅的に言及できなくて、註で列挙したらしい。演劇では本節で扱う劇を例示し、ロネッタ・マッキーの名前を挙げた。2001年出版のこの評伝の書名は、詩人リタ・ダヴによる1989年の詩「カナリア（Canary）」の最後の下りを用いたという。女性歌手や危機的な犠牲（炭鉱に入る鉱夫はカナリアの籠を持参）を意味する「カナリア」の詩は「ビリー・ホリデイの疲れた声」で始まる。ウェブ上でダヴによる詩の朗読を聞くこともできる。

42　https://billie-movie.jp/（2022/09/24閲覧）この公式HPで上映終了後も「予告編」としてビリーの歌声を２分30秒見聞きできる。都内のあと日本各地でも公開された。本節で引用した日本人の発言は、このHPから借用した。

43　https://www.independent.co.uk/arts-entertainment/films/reviews/billie-review-holiday-documentary-singer-biography-director-b1721491.html（2022/09/24閲覧）Billie review: Jazz singer documentary squanders its incendiary premise Linda Lipnack Kuehl was writing a biography of Holiday when she died suddenly in 1978, though her family believe she may have been murdered. *The Independent*, 13 November, 2020

44　ヨハン・ハリ、福井昌子訳『麻薬と人間―100年の物語 薬物への認識を変える衝撃の真実』作品社、2021年２月、p.43, 脚注144

45　https://billie-movie.jp/（2022/09/24閲覧）

46　湯川同様の衝撃を筆者も痛感した。講義では、ビリーの歌う「奇妙な果実」を数え切れないほど流してきたが、実際に歌う彼女を観た衝撃に絶句してしまった。

47　『麻薬と人間』p.465.

48　同書、p.9.

49　同書、pp.41-42.（この部分はJulia Blackburn, *With Billie: A New Lock at the Unforgettable Lady Day*. NY: Vitage, 2005 からの引用）

50　公民権運動真最中の1964年夏、ミシシッピ州から公民権運動家３人（２人はユダヤ人、１人は黒人）が行方不明になった事件を映画化した『ミシシッピー・バーニング』（1988年）では、事件を解決に導くFBI捜査官の一人が黒人だった。当時はありえない設定として物議を醸した。1960年代半ばでさえ不可能なことが、1930年代に実施されるはずもなく、存在そのものが不確定だったのは当然だろう。となるとキュールのインタビューの価値は高い。だからこそキュールの不可解な死も納得せざるを得ないことになる。

51　拙稿「モニークと『プレシャス』」「『カラーパープル』から『プレシャス』まで」『語り継ぐ黒人女性』（メタ・ブレーン、2010年）pp.142-153, 160-162.

52　筆者HP映画コラム#20「L.A.コールドケース（City of Lies）」を参照されたい。
http://www.urawa.ac.jp/~iwamoto/filmcolumn/city_of_lies.html　（2022/09/24閲覧）

53　「監督・制作リー・ダニエルズ インタビュー」映画“THE UNITED STATES vs. Billie Holiday”パンフレット、pp.10-11.

54　「［訳者あとがき］本書の評価と映画化について」『麻薬と人間』pp.484-485.

55　小学校教育現場における人種隔離を訴えた裁判で、アメリカ黒人史上重要な裁判の一つは、Brown v. Board of Education of Topeka と表現される。1954年に最高裁判決が全員一致で原告側勝利としたため、原告名を冠して「ブラウン判決」と称する。原告側弁護団のサーグッド・マーシャル主任弁護士は、後に黒人として最初の最高裁判事となった。

56　ビリー・ホリデイ、油井正一＋大橋巨泉訳『奇妙な果実―ビリー・ホリデイ自伝』晶文社、1971年２月初版（1987年26刷）p.167.

57　「アンドラ・デイ インタビュー」映画“THE UNITED STATES vs. Billie Holiday”パンフレット p.6.

58　Farah Jasmine Griffin, *If You Can't Be Free, Be a Mystery: In Search of Billie Holiday*, Simon and Schuster, 2001

59　上記伝記の註39（p.204）に引用された史料の一部をここに列挙しておく。Evelyn Brooks Higginbotham, “Beyond The Sound of Silence: Afro-American Women in History” *Gender & History*, Vol.1, No.1, March, 1989, pp.50-67.; reprinted in Hine, ed., *Black Women in United States History*, vol.9,（Brooklyn, N.Y.: Carlson Publishing Inc., 1990）, pp.175-192.；Darlene Clark Hine, “Rape and the Inner Lives of Black Women in the Middle West” *Signs, Journal of Women in Culture and Society*, Vol.14, No.4,（Summer, 1989）, pp.912-920.；Deborah Gray White, “Mining the Forgotten: Manuscript Sources for Black Women's History,” *Journal of American History* 74（June 1987）: 237-42.

60　筆者が初めてアイダ・B・ウェルズに出会ったのは、大学院進学を目指していた1985年、以下の論文集であった。15人の黒人活動家の内、女性は３人だけ、時期的に20世紀転換期に興味があった筆者には、他の選択肢はなくアイダ・B・ウェルズと向き合うことになった。Chapter 3 Thomas Holt, “The Lonely Warrior: Ida B. Wells-Barnett and the Struggle for Black. Leadership,” in ed. John Hope Franklin and August Meier, *Black Leaders of the Twentieth Century*, Illinois: University of Illinois Press, 1982. pp.39-61. 後に、以下に訳された。第３章 アイダ・B・ウェルズ＝バーネット―孤独な闘士（トマス・C・ホルト）フランクリン、ジョン・ホープ、マイヤー、オーガスト（大類久恵、落合明子訳）『20世紀のアメリカ人指導者』明石書店、2005年

61　https://amview.japan.usembassy.gov/ida-b-wells-receives-posthumous-pulitzer-prize/（2022/10/02閲覧）

[SELECTED BIBLIOGRAPHY]

【Encyclopedia et al】

1．Susan C. Cook, “Billie Holiday” *BLACK WOMEN IN AMERICA*, editor in chief, Darlene Clark Hine, vol.3, Oxford Univ. Press, 1993, pp.565-569.
2．Susan C. Cook, “Billie Holiday” *Music: Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, editor Darlene Clark Hine（NY: Facts on File, Inc., 1997）pp.137-142.（Almost the same as 1993 Encyclopedia: *BWA*）
3．Darlene C. Hine and Kathleen Thompson, *A Shining Thread of Hope: The History of Black Women in America*,（New York: Broadway Books, 1998）pp.242, 259-260, 269.
4．A. Y. Davis, *Blues Legacies and Black Feminism: Gertrude “Ma” Rainey, Bessie Smith, and Billie Holiday*,（New York: Vintage, 1998）pp.xviii, xx, 30, 57, 72, 161-97.
5．Susan C. Cook, “Billie Holiday” *BLACK WOMEN IN AMERICA*, 2nd ed. editor in chief, Darlene Clark Hine, vol.3, Oxford Univ. Press, 2005, pp.66-69.

【Books on Billie Holiday：原書出版年順】

1．Billie Holiday and William Dufty, *Lady Sings the Blues*, Doubleday & Company Inc.; New York, 1956.
2．筑摩書房編集部『世界ノンフィクション全集 40』筑摩書房、1960年：以下の三項目収録。ロバート・キャパ『ちょっとピンぼけ』、ビリー・ホリデイ『黒い哀しい歌』、エロール・フリン『ハリウッドの王子』
3．ビリー・ホリデイ、油井正一＋大橋巨泉訳『奇妙な果実―ビリー・ホリデイ自伝』晶文社、1971年２月：1957年清和書院出版刊の改訳改版1979年
4．『奇妙な果実―ビリー・ホリデイ自伝（晶文社クラシックス）』晶文社、1998年１月：上記書籍３番の再版。初版にあった大和明「ビリー・ホリデイの人と芸術」は、27年分の「改訂追補」がつけられた。ビリーの作品に関する詳細な説明だけでなく、自伝出版以降の伝記（研究書）に関しても詳細に説明が加えられ、20世紀のビリー・ホリデイ研究史が整理された。さらに「ビリー・ホリデイの生涯」として、時系列の細かい年表も付いた。
5．John Chilton, *Billie's Blues: Biography of Billie Holiday*, Quartet Books, 1975. ジョン・チルトン、新納武正訳『ビリー ホリデイ物語』音楽之友社、1981年４月
6．James Barnett, *Billie Holiday*,（Jazz masters series）Tunbridge Wells（UK）, Spellmount, 1984. ジェイムス・バーネット、塩川由美訳『ビリー・ホリデイ』音楽之友社、1986年６月
7．John White, *Billie Holiday: Her Life and Times*, Spellmount Limited, 1987. & Omnibus Press, 1988.
8．Robert O'Meally, *LADY DAY／THE MANY FACES OF BILLIE HOLIDAY*, Da Capo Press, 1991.（邦訳なし。1991年に米国テレビ放映ドキュメンタリーの活字化。映像項目２番）
9．大山真人『ビリー・ホリデイ―汚辱と苦悩を歌う女（The life story)』メディアファクトリー、1992年７月（特別インタビュー1992年６月26日「前田美波里：ビリー・ホリデイ…その強さと苦しみ」pp.104-109. 1991年３月俳優座劇場「奇妙な果実」で前田がビリー役）
10．“Billie Holiday” Edited by Richard Rennert, Introduction by Coretta Scott King, *African American Heritage: Jazz Stars*,（Chelsea House Publishers, Barnes and Noble Books Inc., 1993）pp.47-53.

11. “Billie Holiday 1915-1959” Legends of American Music-volume Two, Stamp issue year: 1994, UNITED STATES POSTAL SERVICE
12. Donald Clarke, *Wishing on the Moon: The Life and Times of Billie Holiday*, Penguin Books, 1994. ドナルド・クラーク、諸岡敏行訳『月に願いを―ビリー・ホリデイの生涯とその時代』青土社、1998年12月
13. Stuart Nicholson, *Billie Holiday*, Northeastern, 1995. スチュアート・ニコルソン、鈴木玲子訳、大和明監修『ビリー・ホリデイ―音楽と生涯』日本テレビ放送網、1997年８月
14. David Margolick, *Strange Fruit: Billie Holiday, Café Society, and an Early Cry for Civil Rights*, Philadelphia and London: Running Press Book Publishers, 2000. デーヴィッド・マーゴリック、小村公次訳『ビリー・ホリデイと《奇妙な果実》：“20世紀最高の歌” の物語』大月書店、2003年４月
15. Farah Jasmine Griffin, *If You Can't Be Free, Be a Mystery: In Search of Billie Holiday*, Simon and Schuster, 2001
16. 坂下史子「リンチにおける人種とセクシュアリティ：ビリー・ホリデイの『奇妙な果実』（1939）の受容をめぐって」『立教アメリカン・スタディーズ』第25号、2003年３月、pp.111-129.
17. Johann Hari, *Chasing the Scream: The First and Last Days of the War on Drugs*, Bloomsbury Pub Plc USA, 2015. ヨハン・ハリ、福井昌子訳『麻薬と人間―100年の物語 薬物への認識を変える衝撃の真実』作品社、2021年２月
18. 生野象子『ビリー・ホリデイとカフェ・ソサエティの人びと―「奇妙な果実」の時代をたずねて』青土社、2020年10月

【Motion Pictures & Documentary】

１. *Lady Sings the Blues*, 1972. 邦題「ビリー・ホリデイ物語／奇妙な果実」（2h 24m）：Diana Ross 主演
２. TV movies: Director: Matthew Seig, Writer: Robert O'Meally, *LADY DAY／THE MANY FACES OF BILLIE HOLIDAY*, 1990, 59m.（DVD邦題『ビリー・ホリデイの真実』日本コロンビア、2009年）
３. Documentary, *Billie*, 2019. ジェイムス・エルスキン脚本・監督。ビリー・ホリデイに関する2019年ドキュメンタリー映画。1970年代にリンダ・リップナック・キュールがオーディオカセットに録音したインタビューに基づいたが、未完成。
４. *The United States vs. Billie Holiday*, 2021. 邦題「ザ・ユナイテッド・ステイツ vs. ビリー・ホリデイ」（2h 10m）：Andra Days 主演

【Broadway Musical and Plays】

１. *It Ain't Nothin' but the Blues（Musical）*：1999, at The Vivian Beaumont Theater in Lincoln Center
２. *SISTAS the Musical*：2014, at the St. Luke's Theatre Broadway
３. *Lady Day at Emerson's Bar & Grill*：2015, at Circle in the Square Broadway

【拙稿一覧】

１. 岩本裕子「差別への怒りを♪奇妙な果実 に託して［ビリー・ホリデイ物語］」『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年）pp.72-84.
２. 岩本裕子「黒人音楽の源流をたどる」『立教アメリカン・スタディーズ』第25号（2003年）pp.7-32.

3．岩本裕子「巷のブルースから世界のジャズへ」『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレーン、2003年）pp.89-90.
4．岩本裕子「ダイアナ・ロスと『ビリー・ホリデイ物語』」『語り継ぐ黒人女性』（メタ・ブレーン、2010年）pp.110-115.
5．岩本裕子『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）：絶望から希望へ』（明石書店、2013年）随所で引用（pp.163, 165, 233, 236, 246, 291-292, 299-300.）
6．岩本裕子「ミュージカル『シスタス』にみるウーマンフッド」『津田塾大学紀要』第46号（2014年）pp.267-291.
7．岩本裕子「物を通して見る世界史―ジャズからみるアメリカ」『世界史のしおり』帝国書院、2015年１月、p.9.
8．岩本裕子「アメリカ演劇における黒人女優―マヤ・アンジェロウ、ルビー・ディーからオードラ・マクドナルドへ―」『浦和論叢』第52号（2015年）pp.1-29.

[APPENDIX]

ビリー・ホリデイ生涯概略年表
Billie Holiday: 1915-1959

1915　４月７日フィラデルフィアで誕生。父クラレンス・ホリデイ17歳、母サディ・フェイガン19歳。
エリノーラ・フェイガン（Eleanora Fagan）ボルティモアの親戚で育つ。

1925　10歳でサッチモやベッシー・スミスの音楽に親しむ。40代の男性にレイプされ男性は有罪ながら、
ビリーも加害者とされ２年間カトリック修道院に送られる。

1929　母を追ってニューヨークへ。ハーレムの売春宿で育つ。
売春で警察に補導され、ウェルフェア島（イーストリバー）で４ヶ月収監。
ナイトクラブに出入りし、15歳で歌手としての仕事を始める。

1933　コロンビア・レコードのジョン・ハモンドに見いだされ、初レコーディング。

1934　ハーレム125丁目のアポロ劇場に初出演し、コンサート成功。
ベニー・グッドマン楽団、カウント・ベイシー楽団など人気奏者と数多く共演。
サックス奏者レスター・ヤングと出会う。ビリーは彼を「プレス」と呼ぶ。

1937　父クラレンス・ホリデイ、南部巡業中にテキサス州ダラスで死亡。

1938　白人バンドのアーティ・ショウ楽団で、黒人女性最初の一人として巡業に参加中に人種差別的
な出来事を多く経験。各地で問題発生。

1939　ニューヨーク・グリニッジ・ヴィレッジにあるカフェ・ソサエティに出演。
ルイス・アランから歌詞「Strange Fruit」を受け取り、初めてこの歌を歌う。

1941　ジミー・モンローと結婚（26歳）。この頃から麻薬依存に。

1945　母サディ・フェイガン死亡。

1946　映画『ニューオリンズ』（*New Orleans*）にメイド役で出演して、サッチモと共演。
マンハッタンのサナトリウムで麻薬依存症治療。連邦麻薬局の監視開始。

1947　フィラデルフィアのアール劇場出演後、警察に踏み込まれ、逃走後ニューヨークで逮捕されて、
オルダーソン女性用連邦刑務所（West Virginia州）に収監される。

1948　仮釈放出所十日後（３月27日）にカーネギー・ホールでカムバックコンサート大成功。
ジョン・レヴィと結婚（33歳）。レヴィ経営のエボニー・クラブで歌う。

1949　アヘン所持の罪で逮捕。カリフォルニア州ベルモントのサナトリウムへ緊急入院。
レヴィと破局。

1951　ルイ・マッケイと同棲関係（36歳）。

1954　初の欧州ツアー（北欧、独、仏、英）。

1956　マッケイと共に麻薬所持で逮捕。依存症治療。自伝 *Lady Sings the Blues* 出版。

1958　二度目の欧州ツアー。最後のアルバム「レディ・イン・サテン」録音。

1959　５月30日ハーレムのメトロポリタン病院に入院。病室で麻薬発見、６月12日逮捕。
警察の監視下、７月17日死去。享年44歳。セント・ポール・ローマカトリック教会での葬儀に
は3000人以上が参列。ブロンクスの母の墓に埋葬。

Summary

A Study on Billie Holiday as Expressing Tool
—focusing plays and motion pictures—

Hiroko Iwamoto

Billie Holiday（born Eleanora Fagan;1915–1959）was an African American jazz singer. In the 21st Century America, several films about her life have been released including the documentary film, titled, "Billie" based on interviews in the 1970s by Linda Lipnack Kuehl. Before that, the biographical film *Lady Sings the Blues*, loosely based on Holiday's autobiography（*Lady Sings the Blues*）was released in 1972 and was nominated for five Academy Awards, including Diana Ross（1944-）for Best Actress. Another film, *The United States vs. Billie Holiday*, starred Andra Day and was released in 2021. It is based on the book *Chasing the Scream* by Johann Hari. Director Lee Daniels wanted to show her legacy as a civil rights leader. Broadway play, *Lady Day at Emerson's Bar and Grill*, starring Audra McDonald, who received a Tony Award in 2014. In this paper, I'll try to place Billie Holiday in African American women's history.

Keywords Billie Holiday, African American woman, Strange Fruit, Jazz

（2022年11月17日受領）